

# 非二元的なジェンダーをめぐる 実践の抹消に抗して

武内  
今日子

TAKEUCHI  
Kyoko

近年大衆メディアにおいて、「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」が「女」「男」のいずれかではない非二元的なジェンダー・アイデンティティとして盛んに紹介されており、とりわけ二〇二一年六月に宇多田ヒカルが「ノンバイナリー」であるとカミングアウトしたことは多くの反響を呼んだ。わたしは二〇一五年頃からXジェンダー当事者が集ういくつかのグループにかかわり、調査を行ってきたが、オフ会への参加者やXジェンダー／ノンバイナリーを名乗るSNSアカウントの増加などから、ここ数年で非二元的なジェンダー・アイデンティティを明示的に名乗る当事者の多さを実感している。

これらの名乗りはメディアの言説や研究において、「性の多様性」や「LGBTQ+」が可視化されたことで生じた新たな展開として、あるいは「自分らしさ」やアイデンティティの「流動性」が受容されてきた帰結として解釈されることがある。たしかに、出生時に割り当てられた性別とは異なる性を生きようとする人々（以下ではトランスの人々と表記する）が、性的マインオリティに関する多くの書籍やインターネット上の情報に触れ、ニーズを共有しうる居場所やロールモデルとなりうる生き方を見つけることで、自らが望むジェンダーで肯定的に生きやすくなった側面はあると言える。

しかしこうした言説において、当事者が非二元的なジェンダーを生きることに伴う固有の困難や、それぞれが自己を表現し、時に既存の性を解積する枠組みに対して新たな境界を生み出してきた過程の複雑さが看過されていないかどうかが、注意深くあるべきだろう。こうした人々の実践を記述することは、非二元的なジェンダー・アイデンティティをもつ人々の存在が抹消される——その存在そのものを疑われ、なかったことにされてゆく——という固有の困難が生じやすいために、いっそうの重要性をもつ。

では、非二元的なジェンダーを生きる人々はどうのような仕方、いないことにされてきたのだろうか。まず典型的な困難として取りあげたいのは、いずれ性別二元論に回収されるような一時的な状態として、「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」といった名乗りが扱われることである。もちろん、いつかは「女性」や「男性」に移行していくが、現在は保留にしているという人々もいるだろう。しかし、個々人のアイデンティティにおいて他者との関係で揺れ動いてゆく旅路と言いうる側面があるとしても、この旅路が「女性」から「男性」、「男性」から「女性」へという二本の道しかなく、しかも一方通行であるならば問題含みである。こうした前提を所与としてしまうと、「Xジェンダー」や「ノ

ンバイナリー」、「ジェンダークィア」としての確固とした自己の位置づけをもつ人々の言論や、医療を用いて自らの身体を非二元的な自己イメージに合わせて変えてゆく実践、同時に女性であり男性でもあると自らを捉えてジェンダー表現を工夫するふるまいといった、多くの非二元的な生の積み重ねを取りこぼしてしま

う。このようにいくつかの実践を見るだけでも、ジェンダー・アイデンティティが独立した要素というよりも、身体のある方や、服装やふるまいをめぐるジェンダー規範などとの交差において位置づけられてきたことがわかる。現在わたしたちがよく見聞きするようになった「セックス」「ジェンダー」「ジェンダー・アイデンティティ」「ジェンダー表現」といった要素の組み合わせは、一九九〇年代後半から広まっていき、「同性愛者」や「トランスジェンダー」などのそれまで混同されがちであった主体のもつ固有のニーズに焦点を当てることを可能にした。とはいえこれらの要素は、個々人が性を認識するうえで、それぞれゆるやかに関係づけられていたこともある。たとえば、「男」でも「女」でもないジェンダー・アイデンティティが、恋愛の／性的な惹かれとの関係で名乗られていることもある。ミニコミ誌の記述を辿ると、一九九〇年代末頃G・FRONT関西というグ

ループにおいて「X」が名乗られた一つの文脈として、恋愛の／性的に惹かれるジェンダーを問わないという意味で「バイセクシュアル」を名乗り、性別二元論に異議申し立てをおこなう実践があったことがわかる。また二〇〇〇年代のブログや匿名掲示板でも、「Xジェンダー」が、性的惹かれを覚えない「アセクシュアル」と関連づけられて理解されることがあった。

こうしてみると、非二元的なジェンダー・アイデンティティをなかつたことにするよう言説や、それに対する当事者による抵抗の実践には、時期や場による差異が含まれていることにも着目すべきだろう。それは「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」であることに込められてきた意味の違いをなかつたことにしないためである。藤高和輝が「トランス・アイデンティティーズ、あるいは『名のなかにあるもの』について」(『思想』岩波書店、二〇二二年四月号)において述べるように、「たとえ(同じ)名／アイデンティティだったとしてもそれは差異を孕んだ歴史を生きているということ」(同書、七六頁)を忘却しないことが必要であるし、その歴史はすでに当事者や一部の研究者において細々とではあっても蓄積されてきた。

わたしが研究協力者たちから話を聞くにつれて感じるようになったのは、近年になって非二元的なジェンダー・アイデンティティを言語化

するようになった人々と、一九九〇年代末頃や二〇〇〇年代はじめから活動に関わってきた人々との、語りの孕む緊張感や非二元的な概念のもつ重みの違いである。これは現在「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」として生きている／生きようとする人々の生が容易なものであることを意味しない。そうではなく、「かつては殺伐としていた」『いまのXジェンダーはちよつと違いますよね』といった語りに含まれる〈かつて〉と〈いま〉の理解や、〈あの場所〉と〈この場所〉という場所性の差異にもとづく語りの内実を、なかったことにはしたくないと思ったのである。

性をめぐる新たな境界をつくりだすことが、どこにも当てはまらない人を生んでしまう——このことについては、すでに一九九〇年代後半には、警戒すべきだとの声がトランスの人々の間であがっていた。トランスの人々に対するHIV/AIDS啓発活動をおこなっていたTGAPのメンバーであった志麻みなみと麻姑仙女の対談において、志麻は「人をラベリングしていくということは、ラベリングごとに集団を作り出していくわけだけど、ほとんど細かいマイノリティのマイノリティを作っていくってしまつて、最後に何か残してしまふ」と指摘している（「現在日本でTGが直面する社会的問題」クィア・スタディーズ編集委員会編『クィア・

スタディーズ'96』七つ森書館、一九九六年、八四頁）。その背景には、当時トランスの人々が性別適合手術をめざすかどうか、望むジェンダーで常に生活するかどうかといった点で、TS (Transsexual)・TG (Transgender)・TV (Transvestite) というカテゴリー化を相互におこなっていたことがある。実際、この時期に二元的な性別移行をおこなっていた人にとって、非二元的なジェンダー・アイデンティティをもつ人々は見えない存在であったか、その存在の正当性を疑われていたし、「X」を名乗っていた人も自助グループ等の対面の場で「X」を名乗るのは難しかったと語っていた。

それでも、二元的な性別移行を前提とする「性同一性障害」という概念が普及する二〇〇〇年代はじめ頃から、関西の学生を主なメンバーとするACDC ChildrenやROSといった「X」であることが否定されない交流系のグループも徐々に形成されていたことを見落としはならないだろう。こうした語りの場の特徴的なのは、トランスの人々は集っているものの、そのほかの様々なセクシュアリティの人々も参加でき、性別を移行してその後の社会生活をやり繰り返していく方法の話ばかりが焦点とされなかったということである。こうした場でのやり取りは、「X」を名乗っていた人々が常になかったことにされたわけではないという経験的

事実を確認し、生活において非二元的な性の名乗りが重要性をもたずに済む場面もたしかに生起していることを思い出させてくれる。代わりにそこで存在していたのは、当事者間で音楽や漫画、小説、ゲームなどの趣味についてたわいもないことを語り合うような時間でもある。こうした作品において非二元的なジェンダー・アイデンティティをもつ人々が幸せに生きていく描写が少ないということは現在でもしばしば話題になるし、実際日本語圏では、非二元的な性を生きる人物が登場する物語自体も極めて少ないと思われる。しかしだからといって、当事者が非二元的な要素を作品のなかに読み取る可能性を低く見積もってはならないだろう。すでにある作品からも、性の揺らぎや切り替わり、中性性、両性性といった要素を読み取り、自らの経験の履歴と重ね合わせたりエンパワーメントに役立てたりするような実践が積み重ねられてきたためである。

「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」という概念が広く知られるようになるのは、個人ホームページやmixi、ブログ、Twitterといった、他者の性をジェンダー表現から判断しようとするふるまいが機能せず、むしろ自ら文体やアバターを作りあげてゆく余地をもつ、インターネット上のやり取りにおいてである。ただし二〇一〇年代のブログや匿名掲示板、Twitter

上での議論を見ると、「Xジェンダー」がカテゴリーとして可視化されていく一方で、ほかのトランスの人々から批判もされるようになっていたことがわかる。なかでも二元的なジェンダーを志向する人々においては、自らが女性もしくは男性として他者の視線を安全に通過できることを重視し、「どっちつかず」の人を批判的に扱う傾向があった。加えて、非二元的なジェンダー・アイデンティティをもつ人々に対しては、とりわけ可視化されている「FtX」(Female to M: 出生時に割り当てられた性別が女性であり、男女のいずれかには当てはまらない性を生きる人)について、日本社会における「女性」の生きづらさゆえに名乗られていると説明されたほか、「女性」が「男性」になりたがることを指す「ダイアナ・コンプレックス」といった他の概念との境界を問われ、「勘違い」なのではないかという疑念も向けられてきた。このように非二元的なジェンダー・アイデンティティを抹消しようとする言説があるからこそ、「Xジェンダー」の定義を明確化し、新たな境界を設定しようとする動きも当事者間で生じる。「ノンバイナリー」という語は、英語圏の翻訳記事や、宇多田ヒカルのカミングアウトの紹介などを通じてメディアで盛んに取り上げられるようになったが、それ以前に身体的な治療を望む人を指して「ノンバイナリー」を用いようとする提案も

Twitter上でなされていた。

このように一部のグループのみならず、非二元的なジェンダー・アイデンティティをもつ人々の存在が広く可視化されてきたが、それによって新たななかったことにされてゆく人々も生じうる。近年では、書類の性別欄に「その他」という選択肢を目にすることも珍しくなくなり、「X」をパスポートの性別欄に用意したり、非二元的なジェンダーを法的に保障したりする国や地域も増えてきている。けれども、こうした法的な承認が厳しい要件を課して新たな排除的な境界を生じさせないかどうか、単に「その他」として「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」を扱うことによって男女の二元的な性別をより重要なものとして位置づけていないかどうか、そもそも性別表記がその書類において本当に必要なかどうかを注視し、問い直していくべきだろう。

そして忘れてはならないのは、「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」を名乗ってきた人々を抹消していくのが、時にかれらを取りあげるメディアや研究者による言説でもあることである。ジェンダー研究において、対象とする人びとが「シスジェンダー」(出生時に割り当てられた性別と同じ性を生きる人)であることを前提として、当事者が生きてきた多様な経験を考慮せずに机上の議論を展開したりするよう

な傾向は根強くあるように思われる。トランスの人々、とりわけ「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」を名乗る人々を対象とする研究やメディアの言説においても、しばしば「性の多様性」や「流動性」だけが強調されたり、非二元的なジェンダー・アイデンティティの名乗りが、一方では「女」「男」であることをステレオタイプ的に解釈することで性別二元論を強化するものとして、他方では性別二元論に反旗をひるがえす象徴として扱われたりすることがある。これらの言説において、当事者が出生時に割り当てられたジェンダーや、生活しているジェンダー、ジェンダー・アイデンティティ、性的／恋愛の惹かれといった要素の交差を生きる現実（じぶんの現実）は零れ落ちてしまいがち。こうした非二元的なジェンダー・アイデンティティをもつ当事者の実践の連なりをなかつたことにせず、当事者が経験してきたことを細やかに記述し、それらをふまえて当事者が自らの生を否定せずによりよく生きていける思想を紡いでゆく、そんな地道な積み重ねが必要とされている。

(たけうち きょうこ・東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程)

近年の論文に、「未規定な性的カテゴリーによる自己定位——Xジェンダーをめぐる語りから」『社会学評論』第七二巻四号(二〇二二)など。